HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ

タイトル	寄書家から作家へ : 内藤千代子の初期の著書をとり あげて
著者	仙波, 千枝; SEMBA, Chie
引用	北海学園大学人文論集(50): 116(23)-97(42)
発行日	2011-11-30

寄書家から作家へ

――内藤千代子の初期の著書をとりあげて

章

序

のである。『エンゲーヂ』の執筆中、内藤は彼女を見出した河岡のである。『エンゲーヂ』の執筆中、内藤は彼女を見出した河岡のである。『エンゲーヂ』の執筆中、内藤は彼女を見出した河岡のである。『エンゲーヂ』の執筆中、内藤千代子(明治二六年一二月九日~大正一四年三月二三日)内藤千代子(明治二六年一二月九日~大正一四年三月二三日)内藤千代子(明治二六年一二月九日~大正一四年三月二三日)

のであった。 行されるようになり、内藤は作家としての地位を築いていった界』への執筆を続ける中で博文館以外の出版社からも著書が刊界』への執筆を続ける中で博文館以外の出版社からも著書が刊潮風の死に遭うが(明治四五年七月一三日)、その後も『女学世

仙

波

千

枝

明治末から大正初期を生きた女の考え方を知る術になると考え明治末から大正初期を生きた女の考え方を知る術になると考えいく。この三作には『女学世界』に掲載された作品が収録されたという共通点があり、内藤の初期の三部博文館から刊行されたという共通点があり、内藤の初期の三部博として位置づけることができる。多くの女に読まれていた『女学世界』で活躍した内藤の足跡を追うことは、雑誌を読み時には投稿・投書をするという多くの女が関わった営みを通して、は投稿・投書をするという多くの女が関わった営みを通して、は投稿・投書をするという多くの女が関わった営みを通して、は投稿・投書をするという多くの女が関わった営みを通して、は投稿・投書をするという多くの女が関わった営みを通して、は投稿・投書をするという多くの女が関わった営みを通して、は投稿・投書をすると考え

る。 る。 なお残りの著書については、 後日別稿で検討することとす

章 『スヰートホーム』



写真① 『スヰー トホーム』

蔵)

初版は、

博文

市総合図書館所 ム』(写真① 『ス ヰート

藤沢 ホ

く」こともあり、

1

あっ⁽¹⁾ 非水、 な り、Î 足らずで六版を重ねたことは特筆すべきであろう。装丁を杉浦 挿絵を竹久夢二が担当した。全三一四頁で一冊六五銭で 大正二年九月までに二六版を数えた。 特に刊行後四か月 三日で売り切れと

> に投稿している。 裁縫学校で共に学んだ友人は、後日『女学世界』 猫背のT子さん(筆者注*内藤) しをさして居た。 つて居た。ばらきんの金紗をかけて、 藍がゝつた荒い格子の着物に赤い唐ちり は、 よく銀の薄の 何時でも唐人髷に結 かんざ

○部発行されて 九月五日に四〇〇 館より明治四四年

草をしたりした。

中略

ひなんですから、

それや花やかな賑やかな笑声の絶たことつて

七歳の時である。

入学当初、

内藤は「何しろ若い人たち揃

内藤は、

明治四四年春から東京の裁縫学校で学んでいた。

内

裏のベンチで、

畑に残つた大根をぬいて、百姓に怒られたり、三河島で摘

持つて行つた海苔巻を喰べたり、

三四四

折々その引合に引張り出されて、思ひ設けぬ賞讚のお言葉を頂 会長先生は一芸に達する者は万芸に達するとかつて御持論で、 たことがない内藤にとって、 ありませんでしたわ」と青春を謳歌していた。小学校にすら通っ の学校生活であったのである。内藤は大きな庇を張った流行の 海老茶袴を身にまとうこともあった。 執筆が忙しい時は宿題の提出を大目に見ても 裁縫学校はようやく手にした憧れ かつ「常々

髪型に結い、

らえるなど特別扱いされてもいた。 に次のよう

の帯を猫背の背中にしよつてゐた。

日曜日や祭日には、よく二人で遠足に出かけた。

博物館の 瀧の川で

でも、持物を藤色にしてしまつた。の先生が大好きで、その先生の名前にちなんで、何でも彼の子生が大好きで、その先生の名前にちなんで、何でも彼て子さんは藤川先生といふ男の様な、さつぱりとした女

憧憬のまなざしを送る人々にまで、次のような感情を抱くようしかしやがて内藤は、学友のみならず寄書家としての内藤に

になったのであった。

美しいのや無邪気なのや品のいゝのや、絵のやうな友の数多は持ちましても、誰一人真実の話相手になつて呉れるやうなのはなかつたのです。それもその筈、生れながらに家に財あり地位あり名望ある室咲きの花のやうな令嬢達と素に財あり地位あり名望ある室咲きの花のやうな大の数(⑤)

憧れの学生生活や寄書家としての賞讃は、父親のいない地方の貧しい家庭出身で小学校にすら通ったことがないという内藤の貧しい家庭出身で小学校にすら通ったことがないという内藤の貧しい家庭出身で小学校にすら通ったことがないという内藤の貧しい家庭出身で小学校にすら通ったことがないという内藤の貧しい家庭出身で小学校にすら通ったのどが、ないという内藤のはいるい地方であった。

このような中で内藤は、

夏休みを待たずして七月上旬に鵠沼

『スヰートホーム』の刊行について、内藤は『生ひ立ちの記』<〜を針めどに親しんで居りました」という生活を送っていた。の、秋になり東京へ戻った内藤は、「スヰートホームのために思る。秋になり東京へ戻った内藤は、「スヰートホームのために思へ帰省し、『スヰートホーム』は鵠沼滞在中に刊行されたのであ

な著書の出版いたされましたのは。のまゝ『スヰートホーム』と名づけて、さゝやかなお粗末雑誌に掲載しました数種の短篇を取あつめ、巻頭の文をそ雑誌に掲載しました数種の短篇を取あつめ、巻頭の文をそれが、「単名注*明治四四年) 九月初旬でございます。従来

で次のように述べている。

し、仕様もあつたらうのに……第一こんなもの買人があると、仕様もあつたらうのに……第一こんなもの買人があると、紙質もわるく口絵も可笑しく、あまりの見苦しさに興思ひがけなかつたので、やがて送り越された製本を見ますと、紙質もわるく口絵も可笑しく、あまりの見苦しさに興忠がけなかつたので、やがて送り越された製本を見ますと、紙質もわるく口絵も可笑しく、あまりの見苦しさに興忠がけなかったので、やがて送り越された製本を見ますと、紙質もわるく口絵も可笑しく、あまりの見苦しさに興忠がけなかったの事についてお話があった以前に某先生を介して一寸その事についてお話があった以前に某先生を介して一寸その事についてお話があった

訪問の記事などを執筆し読者の人気を得ていた。

だらうかと疑つた。

受けて世に出されたものなさうでした。ですからそんなに反対や冷嘲のあつたにもかゝはらず、K先生が冒険的に引もつとも後日できゝますとね、みんなが危ぶんで種々の

もとをかけるわけにはゆかなかつたんですつて。

険世界』などの記者として活躍する傍ら、『女学世界』にも学校四〇年に早稲田大学を卒業後博文館に入館し、『実業少年』『冒「某先生」は『女学世界』の編集者の一人であろう。河岡は明治内藤は仕上がりにも満足していなかった。「K先生」は河岡潮風、内藤の意志は『スヰートホーム』には全く反映されておらず、

『女学世界』で内藤が放った魅力が著書においても発揮されることを以て誇うべき者に非ず。たゞ自己を偽らず、縄墨に律せらとを以て誇うべき者に非ず。たゞ自己を偽らず、縄墨に律せらとを以て誇っべき者に非ず。たゞ自己を偽らず、縄墨に律せらとを以て誇っべき者に非ず。たゞ自己を偽らず、縄墨に律せらとを以て誇っべき者に非ず。たゞ自己を偽らず、縄墨に律せらとを以て誇っべき者に非ず。たゞ自己を偽らず、縄墨に律せらとを以て誇っべき者に非ず。たゞ自己を偽らず、縄墨に律せらとを以て誇っべき者に非ず。たゞ自己を偽らず、縄墨に律せらとを以て誇っべき者に非ず。たゞ自己を偽らず、縄墨に律せらとを以て誇っている。

し第二等を得た「嫁がぬ人」に行く人」(第九巻第一五号

は冒頭を一部削除して収録され、明治四二年一一月一五日)に応募

とを期待し、『青鞜』とは異なるタイプの作家を世に問わんとし

たのであった。

れるようになった。『スヰートホーム』には、明治四二年末から受賞して注目を集め、以後は二号に一回の割合で作品が掲載さ(第八巻第一五号)に応募した「田舎住の処女日記」が第三等を○号)、同年一一月一五日に刊行された定期増刊号「心の日記」内藤は明治四一年八月に『女学世界』に登場し(第八巻第一

の恋」 内藤の日常生活を想像させる。「ハーモニカ」と定期増刊号「嫁 相手の名前であった。また「おてんば娘」「ハーモニカ」「少女 が登場するが、『生ひ立ちの記』によると、 沢まで開通し、鵠沼は避暑地として有名になりつつあった。 地鵠沼を描く内藤を印象づける。明治三五年に江ノ島電鉄が藤 四四年前半にかけて掲載された作品が多く収録されている。 お「湖畔吟」に主人公嘉寿子の恋の相手として中山という青年 「湖畔吟」は鵠沼の旅館で過ごす青年男女を描いた作品で、 としたかをみることができる(表①)。「天女降臨」「説まつかぜ」 収録作品に、 には鵠沼で暮らす少女の生活が楽しげに描かれており、 河岡が内藤をどのような作家として世に送らん 中山は内藤の が初恋の な

『スヰートホーム』収録作品一覧 表(1)

『女学世界』に おける題名	筆 名	巻•号	発行年月日
ス井ートホーム	無名氏	第10巻第5号	明治43年4月1日
ス井ートホーム	内藤千代子	第10巻第6号	明治43年5月1日
天女降臨	内藤千代子	第10巻第11号	明治43年9月1日
おてんば娘	夢見る人	第10巻第8号	明治43年6月1日
ハーモニカ	内藤千代子	第10巻第9号	明治43年7月1日
熱烈なる少女の恋	内藤千代子	第 9 巻第16号	明治42年12月1日
小まつかぜ 説まつかぜ	萩香	第9巻第10号	明治42年8月1日
嫁がぬ人	内藤千代子	第 9 巻第15号	明治42年11月15日
夢より醒めた女	内藤千代子	第11巻第2号	明治44年1月15日
湖畔吟	萩香	第11巻第7号	明治44年5月1日
思出多き函嶺の湖畔	内藤千代子	第10巻第2号	明治43年1月15日
	おける題名 ス井ートホーム ス井ートホーム 天女降臨 おてんば娘 ハーモニカ 熱烈なる少女の恋 心まつかぜ 嫁がぬ人 夢より醒めた女 湖畔吟	おける題名	ボける題名 単 石 巻・ラ ス井ートホーム 無名氏 第10巻第 5 号 ス井ートホーム 内藤千代子 第10巻第 6 号 天女降臨 内藤千代子 第10巻第 11号 おてんば娘 夢見る人 第10巻第 8 号 ハーモニカ 内藤千代子 第10巻第 9 号 熱烈なる少女の恋 内藤千代子 第 9 巻第16号 歳まつかぜ 萩香 第 9 巻第15号 嫁がぬ人 内藤千代子 第 9 巻第15号 夢より醒めた女 内藤千代子 第 11巻第 2 号 湖畔吟 萩香 第11巻第 7 号

^{*}著書の作品の題名及び『女学世界』掲載作品の題名並びに筆名は、全て本文に付けられたもの

が

き

函

嶺 ₹

の

湖 Ø

なる新語を流行せしめし奇書也。男女青年の現代的傾向を最

した「思出多

同

一等を獲得

学世界』でそ づ 録したが、『女 続 ーム」 ス け 祝編と位 井寺 5] n を収 る \mathbb{R}

とし、

された。 改題され収録 おもひ」 ح

なお巻頭

K

つであった。

夫と妻が協力して営む理想的な家庭を表し、青年男女の憧れ ら「ホーム」を描いた作品はこの一編のみである。「ホーム」 などは収録されておらず、書名を『スヰートホーム』としなが

明治四三年

巻第二号 ム振り」(第

月一五日)

で

増刊号

マ

日)・「新年のマダム」(第一一巻第

明

治四

四 年一

月

三 月

は 0

巻末には定期

「年の暮のマダム」

(第一○巻第一

六号 号

明治四三年一二月

!書の広告は、「本書は東都各女学校学生間にス井ートホ ではなぜ、 書名を『スヰートホ 、 し ム 』 としたのであろう Ì - ム式

よく描写せる小説以上の小説」と謳っている。「ス井ー 篤麿と結婚して鵠沼に母と下女きよと共に住む百合子を主人公 式」とは、 女青年の現代的傾向」を示して支持を得たのであった。 青年」の憧れを代弁し、青年の閉塞感や『青鞜』とは異なる「男 意味する。『スヰートホーム』 内藤の 「ス井ートホー 「ホーム」のような「男女青年」の憧れを描くことを ム は、 は、「ホーム」 赤門工科の学生で男爵の金子 のみならず 1 男女 ホーム

合子の家の婿養子という設定である。 ば 内藤が二度『女学世界』で筆名として用いたことがあ なお金子百合子という名 結いかつては文学に熱中したが結婚後筆を折った女で、

新婚生活や友人との交流を描いている。

百合子は丸髷を

夫は百

前

三七

 Ξ

らずいたようである。たため、内藤がモデルだと思った『女学世界』の読者が少なか

を「夢より醒めた女」とよび、また上京後は「確固たる信念もとして世に送られた。しかし当時、内藤は『女学世界』で自ら内藤は『スヰートホーム』を以て、青年男女の憧れの描き手

なく、めざすべき標的もなく、私の心はさまぐ~に矛盾してる

守っていたのである。そしてこの思いを綴った「夢より醒めた(3)の読者は、「一回毎に御上達の貴女のお作、此頃はすつかり円熟品でうれしうございます」という思いを抱いていた。『女学世界』の読者は、「一回毎に御上達の貴女のお作、此頃はすつかり円熟の読者は、「一回毎に御上達の貴女のお作、此頃はすつかり円熟の読者は内藤の変化を既に察知し、「円熟」と好意的にとらえ見い、裁縫学校になじめないのみならず寄書家としても行きように、裁縫学校になじめないのみならず寄書家としても行きように、裁縫学校にない。

となったのであった。ム』の読者もまた「天真」だけではない内藤の世界を知ること女」は『スヰートホーム』にも収録されたため、『スヰートホー

内藤さんのスウ井ートホームが出てね、けれどあゝ云ふ事述べられたのである。

である。

をするにはまだ早すぎはしないでせうか

(中略)

新らしいお作は一つもないやうですね

(中略)

中になつてよみましたけれど年中同じ事ばつかりあんなに文が月並になつて了つてはねえ……私も初め

お「まだ早すぎはしないでせうか」との言は、内藤への期待を次にいかなる世界を築くかにこそ期待していたのであった。なる。『女学世界』の読者は、青年男女を華やかに描いた内藤が、出すことは、内藤の成長を阻害しかねないとの危惧がうかがえ出すことは、内藤の成長を予感させる内藤の過去の作品を集めて世に転機を迎え成長を予感させる内藤の過去の作品を集めて世に

転機を迎え新たな世界を拓くことへの期待を持って読まれたの内藤の新たな世界に向けられていた。このような中で『スヰートホーム』は、『女学世界』の購読者以外にとって『スヰートホーム』は新鮮表すものに他ならない。

次のように述べている。

ある夕刻、

第二章 『ホネームーン』

写真② 『ホネームーン』

二版を世に送った。 全一 正二年九月までに

三八頁で一冊六五銭である。 ②)、『スヰートホーム』同様杉浦非水が装丁を担当した。 五編のうち八編が書き下ろしで(表 内藤は、 同書の執筆依頼について

より刊行され、 月二九日に博文館 は明治四四年一二 総合図書館所蔵 (写真② ボネームーン』 藤沢市 大

表② 『ホネームーン』収録作品一覧

伺つてもいゝか、つて。

(中略)

版物の事につき是非御面談致したい件があるからこれから

思ひがけないK先生からお電話なんですの。

出

たつてことがうれしくて、早速お友達中へ御吹聴の手紙書

私はまた長い間の疑問であつた人に親しく遇つてお話し

いたほどでした。

題名	『女学世界』に おける題名	筆 名	巻・号	発行年月日
ホネームーン				
紅筆	憧がる > 少女の手紙	内藤千代子	第9巻第7号	明治42年 5 月15日
若き日の戯れ	^{滑稽} 塩加減	萩香	第9巻第9号	明治42年7月1日
華族系	華族系	内藤千代子	第11巻第12号	明治44年9月15日
逝く春の乙女				
学生の都会				
花つみのする夏の夢		内藤千代子	*	
ゼラニアム				
コスモスの頃				
華厳行				
鵠沼日記 上 かるたのまとゐ	田舎住の処女日記	内藤千代子	第 8 巻第15号	明治41年11月15日
中 秋高し	霜月日記	千代子	第 8 巻第16号	明治41年12月1日
下 初春三日	お正月日記	千代子	第9巻第2号	明治42年1月15日
虚栄の都へ				
帝劇の楽屋				
·				

- 『女子文壇』第7巻第11号(明治44年9月1日)に掲載
- **著書の作品の題名及び『女学世界』掲載作品の題名並びに筆名は、全て本文に付けられたもの

二九

中略

お

苦もなくお引受致しました たものを出版てはどうか、そして巻頭に表題の如き長篇が 外にいゝについ その時の御用件とい いのだから、それを書いては貰へまいかとの事なので、 て 姉妹篇の ふのは、 『ホネームーン』とでも題し スヰートホ ームの売行が案

分かる。 頃であった。『ホネームーン』には『女学世界』に初期に掲載さ(望) 信を得た河岡と博文館が改めて内藤を世に送らんとしたことが れた作品が多く収録され、『スヰートホーム』で内藤の魅力に自 河岡潮風の訪問は、 秋に内藤が東京の下宿へ戻って間 らない

しており、

河岡は明治四四年六月に博文館から『呼那須温泉之栞』を刊行

「ホネームーン」の舞台に塩原を選んだ背景には河岡

の法学士神山和雄とその妻艶子が塩原へ新婚旅行に出 0 う内容である。 ように述べている。 巻頭に収録された書き下ろし 内藤は、 塩原を作品の舞台に選んだ理由を次 「ホネームーン」 は、 五高出身 かけると

た。

ました。 調査に出かけてみやうかと、 私はホネームーンの舞台を何処にしやうか、といろ〳〵考 、ました。 (中略)丁度紅楓のころなり、 親友の小枝さんに相談いたし 塩原あたりへ実地

中略

渓流の音、 もう恍然としてすべてを忘れて了ひました(ユル) 三里あまりを車上にゆられく〜て山深く入るまゝに、 色であつたでせう。茫々たる那須野ヶ原を貫く一帯 塩原! 岩石の配置、 塩原! 血の垂れさうな紅楓の輝き、 塩原!! 何といふ美しい仙境の秋 の坦途、 あの 私は

たが、ようやく「親友の小枝さん」 ムーン」 展・運動会の見学などに多忙でなかなか執筆に着手できなかっ の影響があったことが考えられる。 あった。 作中に和泉屋別館・天狗岩・紅葉ヶ丘などを登場させ 内藤らは塩原の宿に二泊して周辺を取材し、「ホネー と取材旅行に出かけたので 内藤は裁縫学校の遠足や文

和様 つた 0 同席するなど、 一方艶子は結婚について、「私は、ちつとも自分の意思でかうな 叔母樣 「ホネームーン」の艶子は、夫の友人が来訪し食事する際には (筆者注*結婚した)んぢやないのだから。 (筆者注*夫) と冷めた考えを持ち、 (筆者注*仲人) 夫と対等の関係を築く妻として描かれ にいけない事でもあつたなら、 の苦情をももちこんでいゝわけなの 夫に対しても「いくら自分の気に たとへばもし 母様や藤岡 ている。

あったのである。 のは甘く楽しい結婚生活だけでなく、結婚に対する女の本音で 回顧する。 した」と述べている。また折に触れて独身時代の男性の友人を を倶にする人ときまつては……云ひ知らぬ寂しさに涙も流 ホーム』の作者として読者の期待に応えたが、そこで描かれ 入つた人とでも、欠点のない方とても、 内藤は二作目で「ホーム」を書き下ろし『スヰー いざこれが自分の未来 n た ま

状態で、 たものであった。 なった。その三日後に内藤と河岡は帝劇で文芸協会の「人形の ン』に収録することとなり、 ムーン』に収録された。『生ひ立ちの記』によると、「帝劇の楽 家」を観劇し、それについて綴った「帝劇の楽屋」は 塩原への取材旅行の翌日、 「気がゆるんで仕舞つて、 は雑誌に投稿するつもりで書きかけたが急遽『ホネームー ついに原稿を催促するため河岡が自宅を訪れることと 「酒場の卓上で書きなぐり」仕上げ 内藤は執筆のため鵠沼へ帰省した 些ともはかゞ行きません」という 『ホネー

号

かり われ恐縮したこと、 そして観劇の翌晩、 『ホネームーン』 『生ひ立ちの記』 河岡が母親思いの息子であることを垣間見 に、 に収録する作品を執筆したのである。 内藤は河岡の自宅で深夜一時過ぎまでか 河岡の母に汁粉やすしなどを振る舞 内

> 書き、 直したりした。 たことなどを綴っている。この時内藤は墨を摺って筆で原稿 河岡は傍らで内藤を励ましながら辞書を引いたり脱字を

慕っていた。なお内藤は後に、上原の遺稿集 内藤と上原が初めて会ったのは明治四三年の春で、上原が鵠沼 家として活躍していた上原綾子(花散里)との再会を記した。 ボートレースに関心を持ち友人と語り合う天真爛漫な様子が描 春の乙女」は東京での学生生活を描いた作品で、 書き下ろし作品は内藤の近況を伝える役割を担っている。「逝く 『女学世界』読者の関心を呼んだであろう。 いう『女学世界』人気の寄書家が登場する「虚栄の都へ」は は異なるタイプの寄書家であったが、 た(『女学世界』第一〇巻第九号 の内藤の自宅を訪れ、 かれている。また内藤は「虚栄の都へ」で、『女学世界』の寄書 (文陣閣出版部 初期の作品が多く収録されている『ホネームーン』において、 同年八月一日)。上原は裕福な令嬢の日常生活を描く内藤と 大正三年)に序文を寄せている。 その様子を上原は「鵠沼の半日」に描 明治四三年七月一日·第 内藤は上原を姉のように 『ひなげしの花 野球の試合や 内藤と上原と _ O

— 108 —

き日の戯れ」、「花つみのする夏の夢」 「ゼラニアム」「コスモスの頃」や「滑稽塩加減」を改題した「若 も内藤 の日常を想像させ

劣な事、 ため裁縫塾の師匠の自宅を訪れ、 の暮らしが描かれている。ここで内藤は、「まあ一同の品性の下 る作品である。 に掲載された三編の作品で構成されており、 嗜好の野卑な事。こんな人達とは口を利くのさへ恥 また巻末に収録された「鵠沼日記」 藤沢の町で買い物をする少女 年始の挨拶の は 『女学世

女郎花、 ばし魂は体を飛んだ」と裁縫塾の同輩と距離を置き、「文学」(投 惜しがつて泣きました」と避暑地鵠沼の女の気持ちを描 二人ではありませんでしたが、お葉さんはそんな時、 女日記」 同く文学の花の香に酔ふて居る方を、 やうに思はれる。(中略)まだ真の友の味と云ふもの知らぬ私と、 これらの作品は、 避暑避寒にはずゐ分都人士も入り込む土地故、すねて立ちたる に熱中する仲間を求める思いを綴った。 金にまかせて我が手活の花とこゝろみた人達も一人や は冒頭部分が削除されている。一方 『スヰートホーム』に引き続き、 かぎりなく慕はしく、 なお「田舎住の処 「華族系」では 鵠沼に住 いつも 61 む内 た? \Box

> 力が発揮されているのであった。 娘です」という反応を示した。 その清新の気人に迫るといふべき」と述べたように、 で見るとくだらない様であつて其実中々うまい事をい 「其の文章は実に独創で何人にも真似の しかし『女学世界』 ならぬ妙所が の 内藤の魅 ふてゐる あ 担当者 が

ような感想を寄せている。 ホネームーン』の刊行について、『女学世界』の読者は次の

り申しましたわ、これでも内藤様崇拝者の一員なので御 てね、 感じがありませんの、 致しませんでしたわ、 いま (す³¹ 内藤様のホネームー 早速拝見いたしましたが、私失礼ながらあんまり感心 あらく、私としたことが、 薄ぺらな、 読んでしまつてから ンが出ましたのね、 奥行のない様に存じまし とんでも 大変な評判なの ない 頭の中に少しの わる口ば か

女の憧れを一時的に満たすものでしかなかっ ジを与えるものではない。 拝者」は既に食傷気味であった。書き下ろし作品も新しい 内藤は、 『ホネームー 『ホネームーン』脱稿後の思いを次のように述べて は 版を重ねたが、 内藤が描く華やかな世界は、 『女学世界』 たのであっ の 内 青年男 た]藤様崇 イメー

は容易ならぬ風教問題である」と言わしめ、

手紙」

に加筆し改題したものである。

男性の友人宛の書簡を集

た

「紅筆」は、

『女学世界』に掲載された

「憧がるゝ少女の

61

た同作品は、

『女学世界』掲載当初同誌の担当者をして「これ

藤を印象づける。

V

て仕舞へば、 に保護される身とならうなんて……。 げた文の端にも書きましたなれど、夢さら先生のお袖の蔭 忘られぬ生涯の思出の一つとなるでせう、とは先生へ差上。 かりお渡しして了つて、自分の責任だけはのがれてみます れを心細く思つたくらゐでした。 な劇場の一夜の楽しかりしこと。 心に足らぬ節のみなれど、兎に角書き上つた原稿をすつ 味気ないやうなやるせない寂寥を感じまして、花やか 日を経るまゝに思ひ出されてなりません。 自然御用もなく遠々しくなるであらうと、そ 懐かしいお部屋のさまな 出版ずみにでも成つ 何もかも

係にすぎなかったようである。 出 この時内藤にはまだ作家になる覚悟はなく、 の一つでしかなかった。 河岡とも、 編集者と著者という関 著書の刊行も思

第三章 『エンゲーヂ』



写真③ 『エンゲーヂ』

た。 次のように説 は内藤を呼び出

脱稿後、

河岡潮風

『ホネームーン』

貴女はもう行

いからだ。今の中早く方向を変へないと読者に飽かれます。 てゐる。と云ふのは如何にも眼界がせまいからだ。経験が浅 きつまりかけ

(中略)

行を成した河岡であったが、『女学世界』の読者が内藤に食傷気 内藤の人気に乗じて『スキートホーム』『ホネームーン』の刊 んか。 なりますよ。すべてを僕に任せて呉れるわけにはゆきませ 勿体ないわけではないか。併し今のまゝだつたら屹度さう れまでに売り込んだ名声を、みす~~凋落させて了ふのも 勉強して修養して、立派な作家になる気はない 自覚なさい、 自重なさい、 あなたの天分を! か。 切角こ

味であったように、

河岡もまた内藤に変化が必要であると感じ

いた。 ていたのである。河岡は、内藤に対し次のような思いを抱いて

満し得たり満足は進歩の敵。 筆に立つ者の基礎の薄弱なるは東西古今みな一なり。松 な絶えず進歩す。世人は同一模型の文章には倦く。かてゝ 加へて、千代子は多年志望せし憧憬せしものゝ内或一部を がこれで、一代子は多年志望せし憧憬せしものゝ内或一部を がこれで、一代子は多年志望せし憧憬せしものゝ内或一部を がいれて、千代子は多年志望せし憧憬せしものゝ内或一部を がいた。 がいたる時代

である。

河岡が最も恐れたのは内藤の慢心であったが、これは河岡の河岡が最も恐れたのは内藤の慢心であったが、これは河岡のとは不可避かつ緊急の課題であった。まして『青鞜』が刊行ことは不可避かつ緊急の課題であった。まして『青鞜』が刊行ことは不可避かつ緊急の課題であった。まして『青鞜』が刊行ことは不可避かでいたのと、小学校すら卒業していない内藤が「筆紀憂であったが、これは河岡の河岡が最も恐れたのは内藤の慢心であったが、これは河岡のえていたのであった。

を探っており、内藤の母は娘が作家になることに賛成したようなお河岡は内藤にこの話をする前に内藤の母に話してその意向なお河岡は内藤にこの話をする前に内藤の母に話してその意はい、河岡の指導の下作家修業をする決意をした。また内藤は(紫)。

三四四

かけるという内容で、明治四四年の暮れに河岡と行った旅行を 基に書いたものである。この旅行の趣旨は次のようであっ の兄妹が、伊豆へ「二人が新生涯に入る紀念に茶目旅行」に出 なり文官試験にも合格)と政子 録されている「名残りの旅」は、 『エンゲーヂ』(写真③ り上げやうといふのです。嫁がんとする名家の令嬢、 なる法学士にすゝめられて、処女時代に名残りを告ぐべく この旅行中の出来事を骨子として、 藤沢市総合図書館所蔵) (第三高女の卒業生) という実 孝 (大学を卒業して法学士と 一篇のローマンスを作 の巻末に収 た。

孝は旅行前に、「処女の時代はもう長へに来ない。して見れば、

気になつてふざけたんです

ので、しまひにや自ら仮定の人物になりすまして了ひ、い

思いを抱いていた内藤は、「すべてを僕に任せて呉れるわけには

かへるべき家も知らず、たゞなやみつかれました」との

服すべき偉大な力もなく、

行くに道

みち

旅程に上る。折しも年末年始、

舞台は豆相の温泉場、

つて

びいてくれるものもなく、

「新しい光明を見出したいと悶へ悶へてゐるのです、が、

— 105 —

にも言及している。学生時代や「処女の時代」に名残を惜しむ職難や生活難を厭い自ら落第する大学生の「学生時代享楽主義」 今の間に出来るだけその時代を楽しんでおく必要があるでは という行為は、 V る中で、 か」とその旅の意義について語った。また孝は、 青年の関心を呼ぶものであったと言えよう。 高等遊民や結婚を忌避する女が話題になってい 卒業後の就 な

田

藤は してい 来ないので河岡と差し向かいになる食事が決まり悪かったと記 屋と同じ棟にあり、 よい部屋に滞在した。「表二階」は同年に夏目漱石が滞在した部 内藤と河岡は、 修善寺にある菊屋別館の「表二階」とよばれる日当たりの 『生ひ立ちの記』に、 . る。 明治四四年一二月二九日から翌年一月二日 桂川の水音がよく聞こえ嵐山が望める。 宿の者に「奥様」とよばれ、 給仕が 内 ま

あっ をさせられることもあった。 内藤らは朝食に洋食を選択した。 沿いに小さい風呂場が並んでおり、 廊下を伝って日に何度も温泉に足を運び、 を好んで食べたようである。 菊屋別館の食事は洋食か和食かが選べるようになっており、 滞在中、 二人はほとんど外出しなかったようである。 菊屋の温泉は大浴場ではなく桂川 滞在中河岡は菊屋別館独特の長 また伊東から運ばれてくる鯛 いっぱいで入れない 内藤はその送り迎え

> して一月五日に内藤は鵠沼 つて病気療養中に滞在した青木館に宿を取り、 した際に乗り遅れ、小船で熱海へ向かった。熱海では河岡がか に出、 内藤は旅行後の様子を、『生ひ立ちの記』に次のように記した。 内藤と河岡は、一 なつて了つてた、君と僕との評判は。つて先輩からの忠告 先生は声をひそめて、 天城丸で熱海へ向かう予定であったが伊東で一時下船 月二日に修善寺を発って天城山を越えて下 ねえ君、帰京てみたら大変なことに へ、河岡は東京へ戻った。 梅林などを見物

状めいた手紙などもお見せになりました。 ですもの、仕方がないわ、ときつぱり申す ば何と言はれたつてかまひませんわ。 ŧ け 知つてる某先生の御手蹟でした。 れどもそれは覚悟の前ぢやありませんの。 「芸術の それは正しく私 ための犠牲 私冤罪なら

中略

ました。 たものとみえまして、 方面には縁の遠い筈の、 何 処から洩れたものです みんなからいろんな手紙が舞ひ込み お裁縫の生徒たちの耳にまで入つ か、 私の お友達… 殊に文壇

中略

それが決していやではなかつた。 むしろ内心うれしくも痛

快でもあつたのです。

集者以上の関係となったのである。 四五年) にやつていらした」と述べ、河岡も『五々の春』 関心が持たれたのは当然であろう。 修行を積むことに周囲の理解が得られ 遠 そして内藤が 0 友人の反発をも買ったことにより、 に という取り決めを交わしてさらに密な関係を築かん 著書 「鵠沼行はいつも土曜」と記したように、 |が好評を博した内藤と人気記者河岡潮 『生ひ立ちの記』で「先生は大概土曜日 内藤は ないと 「文壇の方面 知り、 河岡の下で作家の (博文館 河岡と 風 作家と編 0) 関係 には 明治 毎 ٢ 縁 に

5

濫作や駄作をお強ひなさる」ため、 きや筆はもてない」という内藤に対し河岡は「必要も かし、 内藤と河岡の蜜月はここまでであった。「興 作家としての方向性を見出 な が 向 V 0) か に な

時期の内藤と河岡の迷走ぶりがうかがえる。 の割合で『女学世界』に作品が掲載されていたことから、 す作業は容易ではなかったのである。 (の矜持は捨られません) 関係が円満ではなかった理由を、内藤が幾度となく河岡 内藤はわずか二作しか残してい と主張したからだとしている。 ない。 伊豆旅行後の明治四五 なお内藤は河岡 従来は二号に一 に この 処 口 年

苦

悶の

中

内藤は明治四

五年五月末に河岡

の薦めもあり

那

須

母 が

している。 ない。 性について語り合うことは少なくなったのであった。 に綴るのみで作家としてのあり方を議論する内容は含まれて 野へ旅立った。 誕生日の記念に内藤に贈っ 河岡の病状が悪化したため、 には河岡宛の また内藤は『生ひ立ちの記』 旅行後も二人の関係に改善はなかったが、 旅先で書いた書簡をまとめた ものも含まれ た指輪をこの 内藤と河岡が作家とし ているが、 に 旅行中に紛失したと記 河岡が自身の二五歳 旅先の様子を無邪 「燃ゆる花燃ゆる この 方向

せんか」と嫁ぎ行く姉に対して語り、「春宵記」では 残り」を惜しむ女を描いたのであっ 青年男女を華やかに描く筆致はそのままに、「処女の時代」に「名 するが、 ベ お雛様を、 では「今年がお名残のお正月です。思ひきり遊ばうぢやあ 作品の多くに共通したテーマで、巻頭に収録された 、ている。 0 処女の時代」への「名残り」は『エンゲーヂ』に収録され 内藤は うちにおかざりするのも今年つきりなのねえ」 書名である「エンゲーヂ」 「処女の時代」 の終焉を意味する語として用 は結婚への第一歩を意 「はつ春」 「姉さまの と述 りま た

として生涯を送るのが多くの女の生きる道であっ 明 結婚を忌避する主張を展開していたが、 治四 四年九月に 『青鞜』が創刊され、 そこでは 現実には結婚し妻 た い女」

が、 藤は作品の中で「婦人問題」「婦人の覚醒」などに言及している⑻ 女が現実を受け入れる術となり得る。内藤はこのように、 うな中で、「処女の時代」を謳歌しその「名残り」を記すことは、 い女」とは異なる方法で同性に問いかけたのであった。なお内 . る これらの表現に関する知識があることを示すにとどまって 、 「新し

するものでもあったのである。 を華やかに描きその「名残り」を記すことは、貧しい家庭で育 糠味噌くさい世話女房になりすまして了ふなんて……とても し裁縫学校に入学したのも、「華やかな青春の日の思出もなく、 ち「処女の時代」を謳歌できなかった自身の思いを満たさんと 頃から作品で「身も意志も自由で色あり香あり蜜ある花や 「処女の時代」を謳歌したいという思い 「堪えられなかつた」という思いからであった。「処女の時代_ あだに過ごして何うならう」と述べている。内藤が上京 について、 内藤は初 期

列席した。河岡は小石川区(現文京区)の傳久寺に葬られ、 ことなく脳膜炎で世を去った。 ?の母親は日蓮宗に帰依して日恵と称した。 [㈜] 明治四五年七月一三日、 『エンゲーヂ』の刊行について話し合いがなされ、 河岡は 内藤は臨終に立ち会い葬儀にも 『エンゲーヂ』の刊行を見る 次 河

岡

岡

のような結論を得た。 私の第三の著書、 「エンゲーヂ」については、

計画好きな先生、

もう定価から頁数、

表紙画や広告文の原

お気の早

い御

にと、 稿まで見出されましたため、これは是非共完成させるやう まして、取まとめられることゝなりました。 △△先生 (筆者注*坪井善四郎) も御力ぞへ下さい

中略

明治四五年一月より河岡から月々二〇円の扶助を受けていたこ された一四編のうち、一一編が書き下ろしであった(表③)。 !の母が同書の印税の一部を受け取ることとしたのは、 !の遺志が反映されていると考えられる。 『エンゲーヂ』に収録 河岡が生前に準備をしていたことから、『エンゲーヂ』には河 ども、 それはこの一月(筆者注*明治四五年一月)から先生がお 親戚から補助されてゐました分、月々二十円とい た私の故先生に対する、せめてもの心ゆかしであつた。 立替下さいましたので、物質上で返せる御恩ぢやないけれ へ四分といふ分配法は、△△先生方の御配慮でもあり、 けれども、「エンゲーヂ」の印税、 御母堂へ八分、 ふもの 内藤が 河 私 ま

ため、

印税を分配することで河岡の母の気持ちを和らげようと

河岡の母が内藤に対し良い感情を持っていなかった

とに加え、

『エンゲーヂ』収録作品一覧 表(3)

題名	『女学世界』に おける題名	筆 名	巻•号	発行年月日
はつ春				
春宵記				
春たけなは				
五月ばれ				
青葉の蔭				
蝉時雨				
雲の峰				
月下の宴				
燃ゆる花燃ゆる心				
箱から出た女	箱から出た女	内藤千代子	第12巻第9号	明治45年6月15日
青葉の蔭	青葉の蔭	内藤千代子	第11巻第9号	明治44年7月1日
向陵の夜月	向陵の夜月	内藤千代子	第12巻第7号	明治45年5月1日
Love me little, but love me long.				
名残りの旅				

^{*}著書の作品の題名及び『女学世界』掲載作品の題名並びに筆名は、全て本文に付けられたもの

河岡の死後鵠沼へ戻った内藤は、次のようであった。 袱紗二枚、 に飛び起きて、 生きてゆくには母子三人、食べずにも居られない。 恋人の跡を逐ふたなどと死恥はかきたくなかつたから らくくと呼吸が切迫し、 金簿の高も知れてゐる ――こゝに思ひ至ると、突然発作的 その一念に引きずられて、一日くくを過してきた。が、 銘仙の綿入れを得た。 机に向ふ事もありましたけれど、徒らにむ また内藤は、 動悸が増進してくるばかりで、ど もう貯

中略

うすることも出来なかつた。

河岡がおらずとも作品は書けるという作家としての自尊心 んが、 を握りしめたんです。 みな滅茶々々に嚙みつぶしてしまつた。 墨でもペンでも指輪でも罫算でも、手にあたるほどの物 家内中の空気を震動させてゐた。偽善か孝心かは知りま 口から出まかせの串談など言つて、 て歩いたんです。 母に心配事なんぞさせますのは何より厭だつた。 けれど、けれども、 唇から血を噴きながら、 ……花やかな笑ひ声に 母の前では何気なく 私は眼を据て両手 室中転が せ は つ

したことが理由であろう。 扶助料も受け取った。

なお河岡の母親は、

博文館より遺族

形見として河岡愛用の万年

内藤は『エンゲーヂ』の執筆に専念していたと思われる。内藤を支えた。この時期『女学世界』への作品掲載はないため、と、家計を支えなければならぬという責任感が、河岡亡き後の

ていたのであった。 はって」から、かつて河岡が住んでいた家を見に行った。しかはって」から、かつて河岡が住んでいた家を見に行った。しかはって」から、かつて河岡が住んでいた家を見に行った。しかは沼で『エンゲーヂ』を書き上げ、それを持って上京した内鵠沼で『エンゲーヂ』を書き上げ、それを持って上京した内

が内藤を「謎の少女」と紹介したことにある。なお内藤はこのとよんでいたことに加え、大正元年一一月に『大阪毎日新聞』とよんでいたことに加え、大正元年一一月に『大阪毎日新聞』とよんでいたことに加え、河岡が生前より内藤を「謎の女」(少女)」の著書として世に送られた(一冊七五銭 四四〇頁)。大正元年一二月一六日、『エンゲーヂ』は博文館より「謎の女大正元年一二月一六日、『エンゲーヂ』は博文館より「謎の女

にした。 にした。 この時内藤は、大阪近辺のみならず東京の文士紙に連載した。この時内藤は、大阪近辺のみならず東京の文士紙に連載した。この時内藤は、大阪近辺のみならず東京の文士紙に連載した。この時内藤は、大阪近辺を周遊し見聞記を同にかけ、大阪毎日新聞社の招待で大阪近辺を周遊し見聞記を同にした。

著者は近く一年間に自ら悲喜哀楽幾多人生の波瀾を嘗め尽『エンゲーヂ』の広告には、次のように書かれている。

肉躍らしむ。 の毎編、女流より見たる人情の機微を穿ち一読血湧き再読の毎編、女流より見たる人情の機微を穿ち一読血湧き再読して文も想も愈いよ錬熟し終に此の編を為す(中略)巻中

の作家としての自立を示すものでもあった。に送られたのであった。また河岡の死後の執筆・刊行は、内藤したことにより「錬熟」の度を増したことを示す作品として世『エンゲーヂ』は、内藤が「悲喜哀楽幾多人生の波瀾」を経験

次のように述べている。 『女学世界』の読者は、『エンゲーヂ』を刊行した内藤に対し

「謎の女」と称せらるゝ内藤千代子は、現代式の女性に非ず「謎の女」と称せらるゝ内藤千代子は、現代式の女性に非がして、寧ろ空想と憧憬とを生命とする少作家也。其の作物に何等の印象なく、深刻なく、思想なきも、何となく軽快なるチヤームを有す。(中略)近時少しく人生の殿堂を覗ひたるものゝ如く、其の声の漸く悲調を帯ぶるに至れり、「新の女」と称せらるゝ内藤千代子は、現代式の女性に非ず「謎の女」と称せらるゝ内藤千代子は、現代式の女性に非ず

— 100 —

うやく『女学世界』読者の評価を得たのであった。「処女の時代」くようになって新たな世界を築いたことにより、その著書がよヤーム」した内藤は、「其の声の漸く悲調を帯」び女の痛みを描かつて「空想と憧憬」を描き読者を「何となく軽快」に「チ

期待を表すものに他ならない。 と同じ道を歩まないことが望まれていることは内藤への敬意と と理解されていることは内藤に対する賞讃であり、「新しき女」 ましを与え、共感をよんだのである。 の道を拓いたと言えよう。 「名残り」を記すことは、 現実の生活の中で女に慰めと励 そして本書により、 「現代式の女性」ではない 内藤は作家

『エンゲーヂ』は、 大正二年九月までに九版を数えた。

終 章

『ホネームーン』『エンゲーヂ』は『女学世界』における内藤 女時代」の「名残り」を描くという処世術を提示したことによ て苦悶する様をふまえて読まれ、 して位置づけるべきである。しかし実際には内藤が転機を迎え 人気に支えられ刊行された著書であるため、本来なら集大成と かに乗り越え新たな世界を築くかに注がれていた。そして「処 『女学世界』に掲載された作品を収録した『スヰートホーム』 内藤の著書は評価を得たのである。 読者の目は内藤がその転機を

> 千代子は、 『女学世界』読者の内藤に対する親密な感情と、 は異なる魅力を放つことにより作家への道を拓いたのである。 築き読者の期待に応え得たことが、内藤の魅力を増した。 には筆を執る女の真摯な生き方を見ることができる。 には内藤に地に足がついた世界を描くことを求めた。 61 そして上京後の挫折と河岡の死という逆境の中で己の世 読者は内藤が描く華美な世界に魅了されながらも、 『青鞜』 が話題をよんでいた時期に、 雑誌を購読し 「新しい女」と 最終的 内藤 昇 時 を

(四 〇

注

- $\widehat{\mathbb{1}}$ 『女学世界』 第一一巻第一六号 明治四四年一二月一日
- $\widehat{\underline{2}}$ 『女学世界』 第一三巻第一二号 大正二年九月一五
- 『女学世界』 第一一巻第一二号 明治四四年九月 五

内藤千代子『生ひ立ちの記』牧民社

大正三年

五四~一五八頁

蘆間呉羽「をさな友達」『女学世界』第一八巻第五号 大正七年五月

 $\widehat{\underline{5}}$ $\widehat{\underline{4}}$ $\widehat{\underline{3}}$

日

- 『生ひ立ちの記』 一六六頁
- 8 七一頁
- 『生ひ立ちの記』

9

『生ひ立ちの記』

一六八~一六九頁

学世界』

内藤の著書がこのような読まれ方をした理由は、

内藤が

『女

7 $\widehat{\underline{6}}$

『生ひ立ちの記』

六四頁、

『読売新聞

明治四五年

月二日

の寄書家として読者と共に歩んできたからに他ならな

- 10 故河岡潮風「謎の女内藤千代子」『新公論』第二六巻第八号 大正元年 <u>26</u> 25
- 11 『生ひ立ちの記』 一二八~一三〇頁

八月

12 「新年のマダム」『女学世界』第一一巻第一号 明治四四年一月 二日•

<u>13</u> 「新郎新婦の性格」『女学世界』第一一巻第五号 明治四四年四月一日 明治四四年七月

内藤千代子「青葉の蔭」『女学世界』第一一巻第九号

(4)「誌友倶楽部」より 『女学世界』第一一巻第一三号 日日 明治四四年一〇

月一日

16 <u>15</u> 年一〇月一日 みさご鳥「ス井ートホーム」『女学世界』第一一巻第一三号 『女学世界』第一三巻第一二号 大正二年九月一五日、なお横田順弥は 明治四四

版を所蔵していると述べている 『明治時代は謎だらけ』(平凡社 平成一四年)で、『ホネームーン』第一六

18 『女学世界』第一三巻第一号 大正二年一月一日 17

『女学世界』第一二巻第三号

明治四五年二月一日

19 『生ひ立ちの記』 一七一~一七四百

20 『生ひ立ちの記』 一七四~一七六百

21 『ホネームーン』 七二頁

22 『ホネームーン』 八三頁

24 23 『生ひ立ちの記』 『生ひ立ちの記』 一七七頁 一九四頁

> 『生ひ立ちの記』 一八八~一九〇頁

『生ひ立ちの記』 一一七~一二一頁

『ホネームーン』 二三九~二四〇頁

27

 $\widehat{28}$ 『ホネームーン』 一四六頁

担当者「驚く手紙を読みて感じたるまゝを」『女学世界』第九巻第七号

明治四二年五月一五日

29

30 △△女「驚く手紙を読みて」『女学世界』第九巻第九号

31 月一日 「誌友倶楽部」より 『女学世界』第一二巻第四号 明治四五年三月一 明治四二年七

32 『生ひ立ちの記』 一九一頁

日

33 『生ひ立ちの記』 二〇1~二〇二百

34 萩香「現代の人より」『女学世界』第一一巻第一一号 明治四四年九月

35 『生ひ立ちの記』 二〇二~二〇三頁

Н

<u>37</u> 36 『生ひ立ちの記』 二〇二頁 『生ひ立ちの記』 三三四頁

38 『エンゲーヂ』 三二〇頁

39 『生ひ立ちの記』 二二二頁

『エンゲーヂ』 三一九頁

 $\widehat{40}$

41 『エンゲーヂ』 三一九百

『生ひ立ちの記』 二二三~二四三頁

回 一

<u>元</u>

- (43)『生ひ立ちの記』 二四六頁
- (6) 可爾英男『ユスン字』 尊な(45) 『生ひ立ちの記』 二五二頁
- (46) 河岡英男『五々の春』博文館 明治四五年

二三一頁

- (4) 『生ひ立ちの記』 二七二頁
- (4) 『生ひ立ちの記』 二九三~二九四頁
- (50) 『エンゲーヂ』 一三頁

51

『エンゲーヂ』 二一頁

- (52) 『エンゲーヂ』 六〇頁
- (53) 『エンゲーヂ』 七三頁
- (54) 萩香「うれしい正月日記」『女学世界』第一○巻第一号 明治四三年一
- (56) 『生ひ立ちの記』 三〇四〜三三三頁(57) 『生ひ立ちの記』 一四六頁月一日
- (35) 『生ひ立ちの記』 三三三~三三四頁 第七編 (三康図書館所蔵)
- しめたのハ汝の所為なりとて、打鄭する惨劇を演じたる」と記されている子を、「母ハ一人息子の死去に正気を失なひ、千代子を捕へて、英男を死せ(5) 「稿本博文館五十年史」第七編には、河岡が死去した際の河岡の母の様
- (6) 『生ひ立ちの記』 三四三~三四四頁(6) 『生ひ立ちの記』 三三九頁

- (62) 『生ひ立ちの記』 三四四~三四五頁
- (6) 河岡の『五々の春』の巻末に掲載された『ホネームーン』の広告には、
- (6) 『大阪毎日新聞』大正元年一一月一七日は、「鵠沼の浜在所からピヨツ「謎の女」の語が既に使われている
- (65) 鶴丸梅太郎「『旗の酒場』時代」『郷土研究上方』第一〇一号 昭和 とを以て内藤を「謎の少女」とよんでいる

コリと出現して百万子女の血を湧かさせる奇態の腕ぶし」を備えているこ

- (66)『生ひ立ちの記』 三五七~三六一頁四年五月一日
- 月一日8) 隣の人「自由奔放の女性」『女学世界』第一二巻第一二号 大正元年九

妻賢母の世界 ── 近代日本女性史』(慶友社 二○○八年)を参照されたい*内藤千代子の生い立ちや『女学世界』における活躍については、拙著『良